

「天からのはしご」(要旨)

聖書箇所：創世記28章10~22節

【1】ベエル・シェバからハランへ

大好きな実家に自分の居場所をなくしてしまったヤコブ。事の発端は、兄に変装し、長子の権利を奪い取ったことでした。兄エサウは「弟ヤコブを殺してやろう」(創世記27:41)と、自分の弟に殺意を抱きます。母リベカは家庭内殺人を防ぐために「…すぐに立って…逃げなさい」(同27:43)とヤコブを急ぎ立てて家から逃しました。父イサクの祝福と命令を受け、必要最小限の持ち物を携えて「ヤコブはベエル・シェバを出て、ハランへと向かった」(同28:10)のでした。ヤコブの祖父アブラハム、父イサクが居住した「ベエル・シェバ」。そこは水を供給するための井戸があるだけでなく、神の祝福の約束が与えられた場所でした(同22:19,26:23~25)。両親に守られ、生活に不自由することのなかったヤコブにとって、突如訪れたハランへの旅立ちは人生最大の危機でした。

【2】石の枕で見た夢

旅の道すがら石を枕に眠ったヤコブは夢を見ます。「見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。」(同28:12)その夢の中で主はヤコブに「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である」(28:13)とご自身を明らかにされました。この時ヤコブは誰かを介してではなく、個人的に主と出会ったのです。その時に与えられた祝福は**過去から将来に向かって、ヤコブが伏していた場所から地の四方にまで、そしてヤコブ(個人)から全人類にまで広がる**(*デルク・ホナ*『ティンデル』)というものでした(同28:13~14)。

一人ぼっちで何もするものがないと思っていたヤコブですが、主が彼のそばにおられたことを知りました。眠りから覚めたヤコブは、「まことに主はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。」と恐

れを持って受け止め、その場所を「ベテル(神の家)」と呼びました。

【3】天からのはしご

主と個人的に出会ったヤコブは、「神が私とともにおられて…」(同 28:20)と誓願を立てました。これまでは「私が」と人を騙し、押しのけてきたヤコブです。ここで「神が」とその人生の主導権を神に明け渡すのでした。人は「天上のことは神にお委ねし、地上のことは自分の責任で生きよう」と、神への信仰と日常の生活を切り離すことがあります。ヤコブは天と地をつなぐはしごの夢を通して、神が自分とともにおられ、その旅路を守るお方であることを知りました。

ヤコブの見た夢から、およそ2000年の月日が流れたある日のこと。イエスはご自分の訪問客ナタナエルに「…天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたは見るようになります」(ヨハネ1:51)と言われました。そうです。あのヤコブの夢を思い出させます。ここでは「はしご」が「人の子」、すなわちイエスに置き換わっています。イエスはご自分を天と地、神と人をつなぐ「はしご」と表現されたのです。最初の人アダムとエバの墮落以来、人の罪、咎が神と人の仕切りとなり、人は神と親しく交わることができなくなってしまいました(イザヤ 59:2)。キリストは人の罪、咎のために神の怒りを十字架上で引き受けられ、私たちの罪の贖いとなってくださいました。キリストは地上の私たちと天上の神との断絶の間に立たれ、天と地をつなぐ仲介者となられたのです。▷先が見えない不安と孤独を通して、神と個人的に出会ったヤコブ。私たちも孤独に思える時に、主と向き合い、主の臨在を覚えることができますように。

